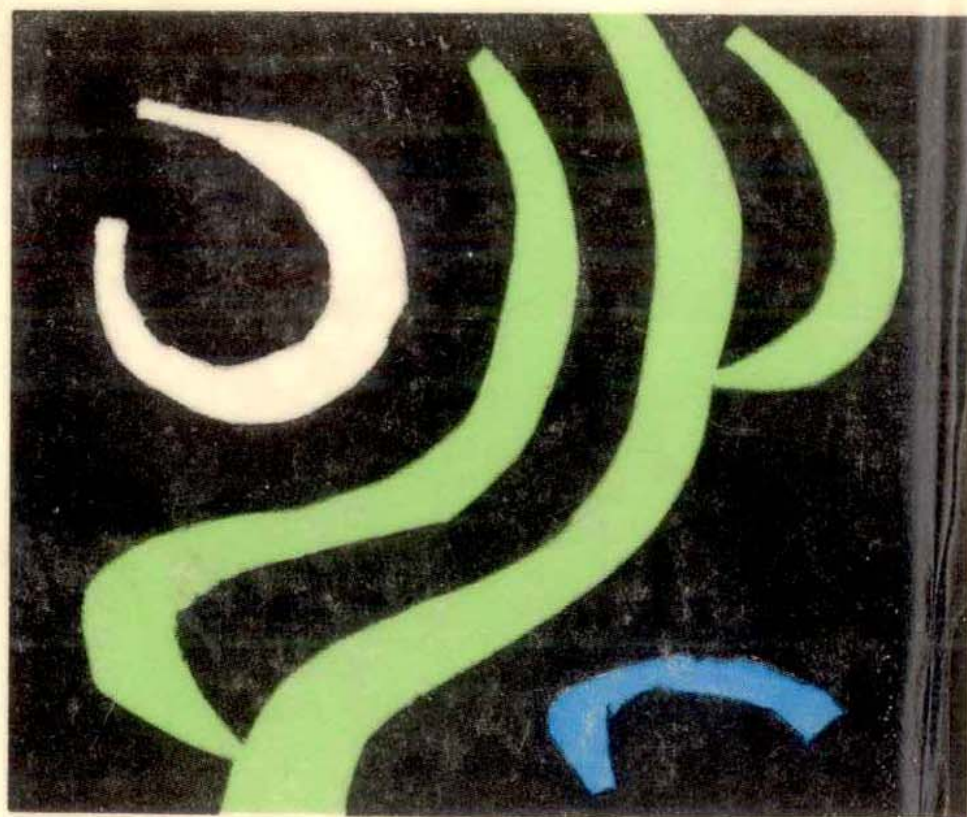


幽 靈

—— 或る幼年と青春の物語 ——

北 杜 夫



新潮文庫

ゆう
幽

れい
霊

—或る幼年と青春の物語—

定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 131 B

昭和四十年十月十日 発行
昭和五十三年五月三十日 二十四刷

著 者 北 杜 夫

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便 番 号 一六二
東京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
電 話 業 務 部 (〇三)(二六六)五一一
編 集 部 (〇三)(二六六)五四二
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社

© Morio Kita 1965

製本・憲專堂製本株式会社

Printed in Japan

新 潮 文 庫

幽

霊

—或る幼年と青春の物語—

北 杜 夫 著



新 潮 社 版

1719

幽

靈

第一章

人はなぜ追憶を語るのだろうか。

どの民族にも神話があるように、どの個人にも心の神話があるものだ。その神話は次第にうすれ、やがて時間の深みのなかに姿を失うように見える。——だが、あのおぼろな昔に人の心にしたのびこみ、そっと爪跡を残していった事柄を、人は知らず知らず、くる年もくる年も反芻しつつづけているものらしい。そうした所作は死ぬまでいつまでも続いてゆくことだろう。それにしても、人はそんな反芻をまったく無意識につづけながら、なぜかふっと目ざめることがある。わけもなく桑の葉に穴をあけている蚕が、自分の咀嚼するかすかな音に気づいて、不安げに首をもたげてみるようなものだ。そんなとき、蚕はどんな気持がするのだろうか。

母は少女のころ、外国で生活していたひとであった。なぜ父と一緒にになったのかを僕は知らな

い。

……彼女の部屋にはおおきな鏡があった。それは唐紙一枚ほどの大きさだったが、硝子のおもてがしんと澄んでいて、彫刻をほどこした木縁もくろずんだ光沢をはなち、とても日本間には似つかないものであった。嵌めこむ場所がないので一方の壁に立てかけられている大鏡は、なんだかつめたい渋面をつくって、部屋の調度をと細かに調べつくしているようだった。

母はその鏡の機嫌をとりたかったのだろう、能うかぎり入念に部屋のなかを洋風にしつらえた。畳がすっかり隠れるようにねずみ色の絨毯を敷きつめ、衣裳簞笥だのベッドだのをよい塩梅に位置させた。幼い眼にはお伽話めいた華麗さが室内を満たしていた。柔かいのや、厚ぼったいのや、袖に襷のついたのや、彩りゆたかなさまさまの衣裳がなにげなく椅子のうえに投げかけられていて、一方の壁はゴブラン織りで覆われ、そのほかおびただしい布地が使われて、粗末なものの陳腐なものを隠していた。

幼い僕にとってその部屋がたいへん気に入ったのは、単なる好奇心というよりも、なにか異質的なものへのあこがれ、肌になじめないものへの愛着であったにちがいない。たとえばどっしりしたマホガニーの化粧台にしても、まだ柔かなたましいを魅する複雑な陰翳をふくんでいた。抽斗ひきのなかのブラッシにしてもピンやマニキュアの道具にしても、少年時代に森のなかで見出した珍奇な虫とか茸とかのよう、我を忘れさせるほどの驚嘆をもたらしてくれた。並んでいるロード・ポー、ローション、香水などの小びんも物珍しかったし、たちこめた甘ったるい匂いは身体

をすくめねばならぬほどこそばゆかった。なかでも可愛いゴム球のついたカットグラスの香水吹きなどは、できることだったら僕もひとつ持っていたかったほどだ。僕は両手で香水吹きをつかみ、その緻密に鋭利な光沢に見入っては、よく刻ときのながれるのを忘れたものだ。しかしそんなとき、ふと傍らから僕の動作を見つめている大鏡の、ひややかな表情に気づくことがあった。すると、ほんの一瞬だが僕はぎくりとし、そのまま逃げだしてしまいたい衝動にかられた。だが、じきにそんな臆病なところは消えてゆき、あの鏡のなかに、なにかの拍子ではかの人の顔なり姿なりがひょっこり現われやしないかなどと、淡いためらいがちな期待さえいだいたりした。

僕はなにかわからぬが、ある種の形に興味をもっていた。だから僕は、よく絨毯のうえにかがみこんで、そこに白く染めぬいてある模様について考えてみた。枝葉のようなかたちもあった。いろいろな身ぶりをした人のかたちもあった。それでいて少し離れて眺めると、枝葉や人の姿が寄りあつまって、ひとつの顔を形造っているように思われた。それは壁掛にあるスフィックスの顔のようでもあったが、どうかした拍子に視線が狂うと、もう顔は消えてしまつて、つまらない混みあった模様がばらばらに見えるばかりなのだ。僕はながいこと絨毯と睨めっこをしては、その変幻に富む顔をとっくりと見極めようとした。しかし結局なんのことやら曖昧になって、そのたびに瞞まされたような、欺かれたような失望に囚われるのだった。

「あの顔は、なに？」

一度だけ母にそう尋ねてみたことがある。ほんのなにげなく言つたつもりだったが、声はばか

にせきこんだふうに喉からとびでてしまった。

「顔って、どれ？　これは鳥でしょう？　そして、これは木の葉。顔なんてどこにもないでしょう」

そう言われてみると、顔は消えてしまったようだった。そればかりか、今まで人のかたちとばかり信じていた模様まで、たしかに鳥に見えてきた。僕には母が魔法を使ったとしか考えられなかった。目をあげると、ほほえんでいる母の際だって白い額のあたりが、妙に見知らぬひとのように見えた。僕はうつむいて手で絨毯を撫でた。生物いきものの毛にさわったような感じがした……。

霊

父は学者というものらしかった。ながい間、この世のことがいくらかわかってくるまで僕はただそう信じていた。

幽

いま考えてみれば、父はひとりの秀でたディレクターであったようだ。生れつき創造ということの尊厳と陋劣とを知りつくしていて、もうひとつの凡庸な平明な世界への憧憬が、どの方面へも彼を深入りさせなかったのかも知れない。とにかく彼がつめたく酔いながらあとに遺したものは、紀行と随筆の本が数冊と、ちいさな青表紙の詩集が一冊だけである。美術評論家とか随筆家とか記されるのはまだしも、旅行家などと註されたことまであった。

僕がほんの幼いころから頭髮は白くなりかけていて、書きものをするときにだけ、角ばった縁なしの眼鏡をかけていた。父はよくその眼鏡をどこかに置きわすれ、そのたびに家じゅうが大騒

ぎをした。母はもちろん、女中や婆やまでが呼びあつめられて、部屋から部屋をせかせかと歩きまわるのだった。そのさまは探しものをするためでなく、せかせか歩きまわるためにのみ動いているように見えた。僕はそんな人たちのあとを追って一緒に歩きまわりながら、じきに壁にできた汚染^{しみ}とか廊下にさしている庭樹の影とかに氣をとられ、当の探しものを忘れてしまうことが多いかった。そのうちに眼鏡は茶簞笥のうへだの、座布団のかげだの、ときには後架のなかから見いだされるのだったが、父はそのたびに「ほう」と嘆声を発し、ひどく不機嫌になってそれを受けとったものだ。みんなは思い思いの笑いを頬に刻み、なかでも婆やは、無理に笑いを齒のかけた口のなかにおしこめようとして苦しげにむせかえた。

父はほとんど口をきかない人であった。ときたま父の声をきくと、なんだか初めてきく人のようにひびいた。よく咳をこらえる仕草で片手を口にもっていったが、そのくせ咳はなかなか出てこなかった。その動作なり恰好なりは漠とした印象を憶いうかべることができるのだが、どうしても父の顔はうかんでこない。いま僕のもっている写真の、もっと若い頃の顔立ちを、記憶に残っているおぼろな婆恰好の映像にかさねてみても、どうもしっくりしないのだ。ただはつきり憶えているのは、その身辺にただよう一種の謐^{しず}かさであった。それはむしろものうい感じ、だらしない感じに近いもので、隠者とか科学者からうける謐かさは丸きり性質を異にしたものである。苦痛もなく死んでゆこうとする病人が、ひよっとするとそんな寡困氣をかもしたすかも知れない。

そのくせ父は、調べものをするときとか書きものをするときには、子供心にも圧迫を感じさせる執念ぶかさを示した。居間に閉じこもって食事もとらなかったし、書庫のなかで幾十冊もの本をとっては開け、とっては開けしたりした。その姿は勤勉というより、なにか呪いをうけて自然にうごいている人のようにも窺われた。僕は未だに、父は好きこのんでああやっていたのではないと信じている。

父の部屋はちいさな日本間で、窓際に坐り机がおいてあった。そのうえで父は、原稿紙の櫛のなかに、ばかに丸っこくちこんだ、几帳面な文字を並べるのだった。彼は毛筆を使ったが、墨をするとき必ずそれを斜めにすりへらした。開きはなしの本が周りにちらばって、どうかすると父自身より本のほうが主人のように見えることがあった。

また何という本だったことだろう。家じゅうが本で埋っていたといっても、けっして言いすぎではあるまい。父はどんな種類の本でも蒐集する性だったので、客間の床の間まで本棚が占拠してしまっていた。いかめしい専門の本のあいだに、寄贈されてきた子供の読物だの婦人向きの本だのがまじっていたりした。だがなんといっても、居間のとなりが本たちの跋扈する世界で、十二畳敷ほどの天井の高いその部屋には、図書館の書庫そのままにぎっしりと本棚がならび、人はそのあいだを身をせばめて通らねばならなかった。それでも足りずに床のうえに積まれているものも随分あった。そのように厩大にあつまった本たちは、あきらかに自負心が強くなり、不遜になっっているようだった。一冊一冊の本など、それがなんという本であるかということなど、ここで

は問題にされなかった。ただ書籍というお面をつけて黙りこくり、読まれることなんぞ希んではないいらしかった。きつと人間がまったく顧みなくなつたとしても、彼等はそんなことにはおかまいなく、倨傲にかたくなにしずまりかえつて、塵にうもれながら積み重なつていたことだろう。

母の部屋とは異なつた魅力が、僕をこの部屋に惹きつけた。階段をのぼると右手に母の部屋があり、左に小廊下をたどると書庫のドアにつきあたつた。ノブが空まわりするため、ドアは一度で開くことは滅多になかつたが、そうかと思うと、ノブをまわしもしないのに、すつとドアが開いたりした。いくらそつと踏みこんでも、床はおじけたように錆びた軋りをたてるのだった。すると部屋じゅうの本がきき耳をたてる気配がした。そして、どんな人間がはいってきたのかと、うさん臭げな視線があつまるように思われた。実際、僕はすぐ横手の本棚の厚い辞典などがこちらを窺っているのを感じ、いそいでそちらに眼をやつてみたものだ。けれども辞典はすぐに知らんふりをするらしかつた。はじめの気まずい何秒かがすぎると、本たちは僕にあきてしまい、もうこちらを警戒するようなことはなかつた。僕は本棚のあいだをぼんやりとさまよい、また佇んでは、うっすらとたまっている埃に指の跡をつけた。それらの本たちにも、やはり僕はそれぞれの顔をみた。赤色の、緑色の、あるいは総革の、あるいは仮綴の装幀と背文字が、いろいろな顔を形造つていた。しかしそれは、あの絨毯の顔と同様、注視すると消えてしまふ顔であることに変りはなかつた。

もうひとつ書き記しておきたい部屋に、玄関わきの応接間がある。非常に凝った造りで、優美というよりもなにかがわしい悪徳の匂いを感じさせた。壁はうすい桃色だったし、厚ぼったい窓掛も二重になっていて、無理強い、人工の、ほとんど童話の魔法宮にちかかった。夜に燈りを消すと、純粹の暗黒が現出した。ぶ厚いカーテンは些細な星影さえもさしこませなかったから、その闇の濃さは怖ろしいばかりであった。

しかし煌々とともされた光の下で、母はこの室によく客をまねいた。そういうときの彼女の姿はひどく異国人めいて、たまにみえる外人の客よりも日本人ばなれして見えた。あちらでふたことみこと言葉をかわし、こちらで陽気に笑い声をあげ、常に座のあいだを動きながら、それでいていささかも優雅な感じを失わぬ母の姿を、僕は半ば感嘆し半ば満足しながら眺めていたものだ。そしてひそかに空になったグラスに残っている赤い桜ん坊をつまんだりした。すると母は目ざとくそれを見つけ、まだ桜ん坊をつかんだままの僕の手をおさえて、おどけた様子で僕の頭を叩くのだった。みんなはそれを笑い、年老いた外人がわざわざ席を立て、僕に訳のわからぬ日本語で愛想をいったりした。しかしそんなとき、僕はとたんに萎縮してしまうのだった。それは、いてはならぬ場所に自分がいる感じ、間違っってこんな羽目に陥ってしまった羞恥であったにちがいない。僕はぎくしゃくとなり、できることだったなら、そのまま消失してしまいたかったほどだ。それでも僕はそこに坐っていた。たとえ自分がのけものの存在であることがわかって、やはりそのまま隅っこの椅子に坐っていた。そうしながら、客たちの談笑や硝子器のふれあう音を聞

いているのは快かった。箱形のいかめしい蓄音機からながれてくる、けだるい、甘美な旋律に聴き惚れるのは快かった。母がレコードを取り代えると必ずその旋律がひびいてきたものだが、その音楽はなんだか異質の世界の呼声のようにも聴きとれた。僕はとおくから伝わってくる笛の音に耳を傾けながら、なじめない光景が、厚ぼったいカーテンや棚に並んだ木彫人形などの群が、ふいに自分に親しい身近なものとして融和してくるような錯覚にひたることができた。だがそれはほんの一瞬で、そんな気持は消えていってしまった。僕はぎこちなく身体をうごかし、そっと周囲の、自分と関わりのない談笑を窺うのだった。

だから僕には姉がうらやましかった。二つ違いの姉は母の子供に似つかわしく、そのような雰囲気ですっぱりとはまりこんでしまうことができた。たとえ客の膝のうえに抱かれていても、また片隅にぼつねんと僕のように坐っていても、彼女はあきらかに僕には手のとどかぬ世界に属していた。身体も魂も僕とは別の材料でできているようだった。ときどき大人たちがテーブルを片寄せて踊るようなことがあると、彼女はすぐにその仲間になった。また客たちも喜んで相手になったのだ。ちょうど「あんよはお上手」のような恰好であつたにしろ。

姉と同年の従兄が遊びにくると、二人はよくダンスの真似事をしてみせた。従兄は役者がうまかった。姉の手をとり、腰をかがめて挨拶をした。ひととおり踊りおえると、彼は上をむいて大声で笑った。姉も首をかしげてくすくす笑った。すると見ている僕も間の抜けた笑い声をたてた。僕は常に観客だったのだ。それは僕だって切ないほどやってみたいとは思っていたのだが、

そのくせ誘われても首をふるばかりであった。自分にはああいうことはできっこないという確信のようなものがあつたのかも知れない。

従兄が泊ってゆくことになる、かならず応接間で、僕たちの考えだした隠れん坊と鬼ごっこを合せたような遊びをした。魔法宮は完全な暗黒となり、つい鼻の先に相手がいてもわからなかつたし、また僕たちはみんな闇が怖ろしかったので、遊びというよりもっと真剣な、緊張しきつた幾刻かが過されるのだった。

……どんなに目を睜^{みひら}いても、見えるものはすべて均質の漆黒であつた。その漆黒は目から遠慮なくながれこんできて、身体全体が闇と同じものになり、どこまでが自分の身体なのかわからなくなる。僕は椅子のかげにしゃがみこみながら、ときどき不安になって自分の手足にさわってみたりしたものだ。そのうちに、鬼がそろそろと近づいてくる気配がする。ときにはミシリという音がしたりする。息づかいが闇を伝わってくるようで、こちらもそろりそろりと反対のほうにいらざってゆくと、思いがけず相手の身体にぶつかってしまうこともある。それでもうまく逃げて、壁際に平たくなってしまうと、なかなか掴まるようなことはなかった。だが、ふいに闇のなかからの手が頬をかすめたり、あるいはこちらが鬼で、いい加減にだした手が相手の首すじにかかったりしたときの感触は、とても今となつては言いあらわせない。皮膚は極度にうすくなり、肉の感覚はすべて表面にあつまつて、かすかな接触が全身をわななかしした。それは単に掴まること掴まえることの感情だけでないにちがひなかった。あとでのべる銀白色の鱗粉から僕のうけた感動

にも近かったかも知れないし、あるいは人がはじめて燃えるような異性の肉を知ったときの心情にも通ずるものがあつたかも知れない。

誰かが掴まって燈りがつけられると、姉はきまって隠れていた場所から首をのぞかせながら、「あーあ、こわかった！」と言った。掴まえられるとちいさな悲鳴をあげた。鬼になったときには常に音を立てたり笑ったりするので、どうしても相手を捉えることができず、そのため鬼を交替しなければならぬこともあつた。それに反して従兄が鬼になると遊戯はおそろしく真剣なものになった。彼は音というものを立てなかつた。息さえもしないらしかった。じつと闇のなかで耳をこらして、どこかにひそんでいる相手の気配を嗅ぎだしては、じわじわと近よってきつた。その恐怖に堪えられず、ぐったりとソファアのかげに坐りこんでしまうと、たちまち身体が闇に溶けこんでゆく錯覚をおぼえた。

また闇の重みというか動きというか、とにかくこの暗黒は昼間の空気なんぞと同じものではなく、なにか生きた物質であることが感じとれることもあつた。事実、闇は僕の耳をこそばゆくおしついたり、腕をそろそろと這い降りたりした。

人は幼年期を、ごく単純なあどけない世界と考えがちだが、それは我々が逃れられぬ忘却とい